

第五号で述べた通りであり、霞ヶ浦、北浦周辺の河川から流入する水量は年間一八億トン、この水門から流出する余剰水は一四億トンと推定されてゐる。

水門を起点として霞ヶ浦の北西端桜川河口（土浦市）までの距離は、水路七二Km、恋瀬川河口（石岡市高浜）までは七〇Km、北浦の北端巴川河口（鉾田町論所）までは四〇Km、延々海跡湖特有の自浄水帯を型成して落水はこの水門に至る。その包蔵水量は推定八億六千万トン、水門外は利根川河口の気水域にして、銚子大橋までの距離は僅かに一六Km、近年完成した利根川と黒部川の両水門が一連してここにらぶ。水門開放時の流状は潮の差し引きにより活発で、特に上げ潮時に於いては塩水流入量が多く、潟水期には両浦の湖心にまで達する。

これが海跡湖に於ける自然の条理であり、ここに漁業の繁栄が見られた。余剰水（流出）について見ると雨量は年間平均したものでなく梅雨期（六月）と台風期（九月）には集中して降るので、洪水になりやすく、夏（八月）と冬（十二月、一月）は少く潟水になりやすいので雨期には流出量が極めて多く、干天期になると潟水してときには外水域より水位が低下する場合も見られる。この自然条件のもとで、近年水の需要が激増するに至り、この水門による調節機能は早くも限界に達するに至った。

このことは、鹿島工水の需要が激増する以前より明白なことであり、工水計画のずさんさを遺憾なく暴露するに至つてゐる。霞ヶ浦開発総水需要計画によると、昭和五十五年における鹿島工水及び上水の一日消費量は、一、四四七、四四〇トンとなり、これは毎秒四〇トン計画の実に二、三、四、五倍に当ることになり、早くも水資源を何れかに求めなければ対応できない事態に追い込まれておりその不足量は毎秒九四トンと見込まれてゐるが、これに對して具体案がない。これがため流域漁業の前途はまことに暗鬱たるものである。

ところで、現時点の問題であるが、潟水期には塩水の流入防止（工水確保）を目的として永く水門の閉鎖が続くので、汽水域からの魚道は断絶して、両浦の周囲から流入する汚水は滞留して、湖水の自浄作用をさまたげ、富栄養化は進み「アオコ」の異常発生を見る。ここに至つては上水道は危態に至り、漁害は頻発、開ける、閉めるとけんけんごうごう。鯉の大量死に際し、県当局は責任を天災に転化して、あいまいなことを言っている。これでは事態は決して改善されない。常陸川水門の閉鎖が原因して第一に被害を蒙つたのが常陸川漁協の権利水域に於ける「大和じじみ」であり、これは塩分濃度の低下へドロの堆積による水中酸素の欠乏……とみられ、こ